九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「ひかりの素足」論 : 楢夫の「子捨て」におけるグリム童話「ヘンゼルとグレーテル」との関連性

賴, 怡真

https://doi.org/10.15017/1398577

出版情報：九大日文. 21, pp.20-46, 2013-03-29. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

「ひかりの素足」論

――楢夫の「子捨て」におけるグリム童話「ヘンゼルとグレーテル」との関連性――

賴怡真（LAI Yichen）

一、はじめに

かつて東北地方においては、食糧難が起きると、働き口のない年配者及び子どもが真っ先に犠牲となった。柳田國男の『遠野物語』（初出は聚精堂、明治四三年六月。本稿による引用は『定本柳田國男集第四巻（新装版）』（筑摩書房、昭和四三年九月）による）の第一一一話において「山口、飯豐、附馬牛の字荒川東禅寺及火渡、青笹の字中澤竝に土淵村の字土村に、ともにダンノハナと云ふ地名あり。その近傍に之と相對して必ず蓮臺野と云ふ地あり、昔は六十を超えたる老人はすべて此蓮臺野[1]へ追ひ遣るの習ありき」（四六頁）とあるのもそのためである。このような棄老の風習はその更に昔まで遡ることができる。『古今和歌集』（第一七巻雑歌上、読人知らず、第八七八首）において、「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（『古今和歌集』（小沢正夫校注・訳）小学館、昭和四六年四月、三三四頁）という歌があり、またこれを踏まえて詠まれた『大和物語』の第一五一段には「我がこゝろ慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て／と詠みてなむ、またいきて迎へ持て來ける。それより後なむ、姨捨山といひける。慰めがたしとは、これがよしになむありける」（『日本文學大系 第二巻』國民圖書、大正一四年六月、一六九～一七〇頁）とある。さらに、『源氏物語』（宿木二八）においては、「なぐさめむことを思ふに、さらに、姨捨山の月澄みのぼりて、夜更くるままによろづ思ひみだれ給ふ」（『日本古典全書』（池田龜鑑校注）朝日新聞社、昭和三〇年一月、一五六～一五七頁）とある。『更級日記』の題名は姨捨山の歌の舞台になった信濃（長野）更級郡に由来すると言われている。その中には「月もいでてやみににくれたる姨捨になにとて今宵たづねきつらむ」（『新日本古典文学大系24』（長谷川政春他校注）岩波書店、平成元年一一月、四三一頁）とある。さらに例を挙げてみると、『今昔物語集』（第三〇巻第九話「信濃國夷母弁山語」）において「ワガココロナグサメカネツサラシナヤヲバステヤマニテルツキヲミテ（略）今モ然ル事ハ有ヌベ然テ其ノ山ヲバ其ヨリ姨母弃山ト云ケル。難ナグサメガタシト云フ譬ニハ舊事ニ此レヲ云ウニ其ノ前ニハ冠山トゾ云ケル冠ノ巾子コジニ似タリケ語リ傳ヘタトヤ」（『今昔物語本朝之部下』（芳賀矢一纂訂）富山房、大正一〇年四月、五七五～五七六頁）とある。現代になると、昭和三一年には深沢七郎の第一回中央公論新人賞の受賞作品『楢山節考』（「中央公論」昭和三一年一一月号）という姥捨伝説をモデルにした作品もある。これらに共通している話型のパターンとして、「男は心がやさしく、いつまでも孝養したいと思ふのだけれども、その女房が甚だよくない女で、年寄りをうるさがつて棄てゝしまひなさいと始終勸める」（柳田、「親棄山」『定本柳田國男集第二十一巻（新装版）』筑摩書房、昭和四五年二月、三〇一頁）ということが挙げられる。このような捨てられる予定の老人に

対する態度が男女で異なっているが、このような話型は形を変えて、グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」（KHM15）[2]においても描かれている。この作品においては、姨捨ならぬ、子捨てというテーマが描かれているが、その背景には深刻な食糧難があった。自分の子どもを棄てることに抵抗感のある父親の態度とは対照的に、継母は子どもを棄てなければ四人とも餓死するしかないと言って子どもを棄てるように父親を説得する。

本稿においては、生活困窮者による「子捨て」の物語を共通のテーマと見なして、宮沢賢治の「ひかりの素足」（生前未発表）がグリム童話「ヘンゼルとグレーテル」と同じ水脈にある作品であることを検証したい。この作品には、主人公として一郎と楢夫という兄弟が登場する。まずはその名前の設定について考えてみよう。冒頭では一郎と楢夫という名前だったが、その後、ペルとゼルという名前に変わり、さらにペルンとペルに変わる段階では共通語を話すようになり、ふたたび一郎、楢夫に名前が変わる段階では岩手の地方語を話すようになる[3]。変化後の名前と「黄いろのトマト」（初期形大正一三年）に登場する主人公兄妹のペムペルとネリという名前が似ているという点から、「ひかりの素足」と「黄いろのトマト」の関連性を見いだすことができる。

また、「黄いろのトマト」の冒頭部における描写が、「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」「グスコンブドリの伝記」「グスコーブドリの伝記」[4]の場合とほぼ同じであることから、同じ系譜の作品だと考えてよいだろう。そして、「ひかりの素足」の冒頭で描かれている、朝、弟の楢夫がまだ寝ている間に一郎の目が覚めて、父が外で薪を燃やしているという描写は、「ブドリの伝記」の草稿における「四、沼ばたけ／ブドリは森の中の昔のじぶんのうちのなかに睡ってゐました。／お父さんやお母さんたちはもう起きて家のまはりで野菜や薪の支度をしてゐる様子でした。妹のネリもブドリの近くにまだ睡ってゐる様子でした。そのうちお父さんが何べんもブドリの枕もとを何かさがす様子で歩いてゐました」（『校本 第十一巻』校異四九二～四九三頁）という描写[5]と極めてよく似ている。

このように、「ひかりの素足」「黄いろのトマト」「伝記群」が複雑に絡み合いながらも同じ水脈にある作品群なのだと考えることができるが、これらの作品にはもう一つの特徴として、年端の行かない兄妹（姉妹、兄弟）が登場することを挙げることが出来る。このような作品を、拙稿「宮沢賢治童話の「兄妹もの」――「青い鳥」「山椒大夫」との比較――」（「近代文学論集」第三八号、平成二五年二月）では「兄妹もの」に分類した。ほかの作品に登場するのが異性の兄妹であるのと違って、「ひかりの素足」では同性の兄弟が登場しているという差異があるが、「兄妹もの」という同じ水脈に連なる作品であることに違いはない。

したがって、「ひかりの素足」は「兄妹もの」の水脈にある作品の一つでありながらも異色の作品である。それは兄弟らしくない「一郎」と「楢夫」という名前の設定に理由がある。賢治作品の「兄妹もの」に登場する兄妹の名前を見てみると、「一郎」と「楢夫」という名前の設定に違和感が感じられる。童話

「双子の星」においては主人公の双子の名前は「チュンセ」と「ポウセ」である。また、「伝記群」の先駆を成す「ネネムの伝記」の兄妹の名前は「ネネム」と「マミミ」だが、後継テクストの「ブドリの伝記」（「グスコンの伝記」）では兄妹の名前は「ブドリ」と「ネリ」に変わる。また、「黄いろのトマト」の兄妹の名前は「ペムペル」と「ネリ」で、「黄いろのトマト」と同じ時期（大正一三年）に生徒の清書によって成立した作品「ポラーノの広場」においては、姉弟の名前は「ロザーロ」と「ファゼーロ」である。これらの作品の兄妹の名前にはどれも、例えば「ネネム」と「マミミ」や、「ブドリ」と「ネリ」、「ロザーロ」と「ファゼーロ」の場合のように、音律の重複や同じ音で終わるといった命名の一貫性が見られ、兄妹らしい名前が付けられている。しかし、「ひかりの素足」の主人公兄弟の名前の「一郎」と「楢夫」には名前の一貫性がない。「一郎」がいかにも長男らしい名前であるのに対し、二番目に生まれてくる子どもには「二郎」や「次郎」を付けるのが妥当だが、「一郎」とは関連のない「楢夫」という名前が付けられている。兄弟らしくない一郎と楢夫の名前の設定から、一郎と楢夫が血縁関係のない兄弟なのではないかと考えられる。そうであれば、グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」の場合と同じように、楢夫が吹雪の中で遭難しなくても捨てられる予定の子どもであった。そして、その背景には柳田國男『遠野物語』や大和物語、古今和歌集、更級日記などに登場する「姨捨山」の話型と同じように、「飢饉」が「姨捨」ならぬ「子捨て」の原因であった。このような視点から作品を読み直すと、作品の冒頭部で描かれている、父親や兄の一郎の不自然な振る舞いや、「風の又三郎」という楢夫の死の予告夢の意味がはっきりと浮彫にされる。

「ひかりの素足」の先行研究では、「ひかりの素足」が賢治の他の作品と比較されることはあったが、外国文学と比較されることはなかった。鈴木健司は、「象のやうな形の丘」の描写が共通していることから、「ひかりの素足」が「水仙月の四日」、「若い木霊」と同じ系統の作品だと指摘している[6]。また、分銅惇作は、作品に描かれている浄土のイメージと「青森挽歌」のトシが死後に上った天上の世界のイメージとが一致しており、それが後に「銀河鉄道の夜」の幻想四次元の世界に発展していることから、「ひかりの素足」がこれらの作品の「原相的な位相」を示していると指摘している[7]。杉浦静は、「巨きな素足の人」が一郎と楢夫に話す、あらゆる本が入っている図書館についての話が、「銀河鉄道の夜」の第三次稿のブルカニロ博士とカムパネルラの会話に引き継がれていることから、分銅惇作の指摘と同様に、「ひかりの素足」がやはり「青森挽歌」と「銀河鉄道の夜」の先行作品であることを指摘している[8]。

このような先行研究とは違って、本稿では外国文学との比較研究を行うことにする。「ひかりの素足」における一郎と楢夫という兄弟らしくない名前の設定に注目し、この作品には「ヘンゼルとグレーテル」に見られるような「子捨て」の要素があることを検証するが、その前に、日本におけるグリム童話の受容史を概観してみたい。日本におけるグリム童話の受容史につ

いては、虎頭恵美子らの論文[9]で詳細に語られているので、本稿では必要な点にだけ触れておこう。グリム童話が初めて日本で翻訳されたのは、ドイツで一八一二（文化九）年に初版が出版されてから七五年も経過した明治二〇年四月のことで、その翻訳書が桐南居士（菅了法）訳『西洋古事神仙叢話』（集成社）であった（虎頭、一〇七～一〇八頁）。また、明治二四年に四〇篇のメルヘンを掲載した渋江保（幸福散史）訳『小学講話材料　西洋妖怪奇談』（博文館）には「十二人の兄弟が烏に變せし話」という物語が登場する。それは「七羽の烏」と「十二人兄弟」を合わせて編纂した物語になっており、このような初期の翻訳においては、省略をされたり変更を加えられたりすることが多かった（虎頭、一〇九頁）。大正期に入ると、グリム童話の残酷性などの要素を省略せずに、原文に忠実な翻訳を行なった中島孤島による『グリムお伽話』（大正五年）や『続グリムお伽話』（大正一三年）が出版されて広く読まれたという[10]。また全訳[11]としては、大正一三年に金田鬼一が『世界童話大系』の第二巻（大正一三年）、第三巻（昭和二年）の独逸編『グリム童話集』で翻訳を掲載している[12]。「ひかりの素足」の創作時期が大正一一年前後[13]と推定されていることに留意すれば、賢治の創作にグリム童話の受容があると考えた場合、賢治が『グリム童話』を読んだのは金田の全訳が出る前のことだとわかる。また、賢治が親友の保坂嘉内に宛てた「書簡95」において、「アンデルセン」に言及する際には、ドイツ語の発音どおりに「アンデルゼン」と書いていることから、賢治が独学でドイツ語を勉強しており、ある程度のドイツ語の知識があったことがわかる[14]。以上のことを踏まえて、本稿では「ヘンゼルとグレーテル」から引用をする際には、大正三年に[15]精華書院から出版された、独和対訳版で小笠原昌斎による訳註がある『グリムお伽噺講義　上巻』[16]を用いることにする。なお、宮沢賢治が実際にどの翻訳でグリム童話を読んで受容したかについては、現段階では明確ではないので、本稿では当時の日本で入手可能だった翻訳を賢治が読んだと想定していることを、あらかじめ断っておきたい。

二、「風の又三郎」における予言の意味

「ひかりの素足」は、よく晴れた、とても天気のいい冬の朝に、一郎、楢夫兄弟が眼を醒ますところから話が始まる。

> 小屋の隅から三本の青い日光の棒が斜めにまっすぐに兄弟の頭の上を越して向ふの萱の壁の山刀やはむばきを照らしてゐました。
>
> 土間のまん中では榾が赤く燃えてゐました。日光の棒もそのけむりのために青く見え、またそのけむりはいろいろなかたちになってついついとその光の棒の中を通って行くのでした。（『校本　第七巻』二七〇頁）

このような麗しい朝の描写を背景にして、弟の楢夫が「風の又三郎」が登場する恐ろしい夢について語りはじめる。「風の又

三郎」というのは宮沢賢治の同名作品にも描かれている民間伝承の人物のことである。天沢退二郎が「このような風の又三郎の予言のエピソードにおける、不安の構造・力学とでもよぶべきものは、「ひかりの素足」前半部の進行を支えている」[17]と指摘しているように、この作品では「風の又三郎」に死神のように死を与える性質があることは間違いない。しかし、「風の又三郎」の持つ役割について、従来の先行研究では「楢夫のその後の遭難の予告」だけが注目され、「風の又三郎」が夢のなかで楢夫に語る内容についての言及がほとんどない。泣き止まない楢夫が父親と兄に訴える「風の又三郎」に言われたことは、三つに分けて描写され、その内容に注目してみれば、それがある儀式の流れに沿って語られていることに気づかされる。以降では楢夫の見た恐ろしい夢について検証して論じていきたい。

①「何て云った。風の又三郎など、怖っかなぐない。何て云った。」

「お父さんおりゃさ新らしきもの着せるって云ったか。」

楢夫はまた泣きました。一郎もなぜかぞっとしました。けれどもお父さんは笑ひました。

「あああはは、風の又三郎ぁ、いゝ事云ったな。四月になったら新らし着物買ってけらな。一向泣ぐごとぁないぢゃぃ。泣ぐな泣ぐな。」「泣ぐな。」一郎も横からのぞき込んでなぐさめました。（『校本 第七巻』二七四頁）（傍線部は引用者による、以下同）

②「それがらお母さん、おりゃのごと湯さ入れで洗ふて云ったか。」

「ああはは、そいづぁ嘘ぞ。楢夫などぁいっつも一人して湯さ入るもな。風の又三郎などぁ偽こぎさ。泣ぐな、泣ぐな。」

お父さんは何だか顔色を青くしてそれに無理に笑ってゐるやうでした。一郎もなぜか胸がつまって笑へませんでした。楢夫はまだ泣きやみませんでした。（二七四頁）

③「それがらみんなしておりゃのごと送って行ぐて云ったか。」

「みんなして汝のごと送てぐど。そいづぁなぁ、うな立派になってどごさが行ぐ時ぁみんなして送ってぐづごとさ。みんないゝごとばがりだ。泣ぐな。な、泣ぐな。春になったら盛岡祭見さ連でぐはんて泣ぐな。な。」

一郎はまっ青になってだまって日光に照らされたたき火を見てゐましたが、この時やっと云ひました。（二七四頁）

まず、本文②において、父親の言う「楢夫などぁいっつも一人して湯さ入るもな」というくだりと、「お母さん、おりゃのごと湯さ入れで洗ふ」というくだりとを合わせ読んでみると、楢夫は幼い子どもであるが、もうすでに母親の手を借りてお風呂に入るほどの小さい子どもではないことがわかる。父親の「楢

夫などぁいっつも一人して湯さ入るもな」という台詞は楢夫をなだめる言葉として読み取れる一方、人に体を洗ってもらう場合、もう一つの解釈の可能性が喚起される。それは亡くなった者の体を近親者がたらいの湯で清めるという「湯灌」の儀式である。そのように考えると、本文①の「お父さんおりゃさ新らしきもの着せる」における「着せる」という言葉にも同じようなダブル・ミーニングが含まれていることに気づかされる。そのすぐ後に続く「四月になったら新らし着物買ってけらな」という父親の台詞は、単に新しい洋服を買ってあげるという意味以外に、「湯灌」の後に、故人に死装束を着せるという意味にも解釈できるからである。もともと「着せる」という動詞の受け身には、第三者によって衣類を着せられるという意味があり、つまり自分の意志に反して強制的に着せられるか、あるいは自力では着ることができない、という二つの意味が含まれている。後者の場合、やはり老人、幼児、病人、もしくは亡くなった人の場合が想起される。新しい服を着せられることの次の段階は、母親にお湯に入れられることであった。そしてまた次に出てくる本文も合わせて読んでみると、「みんなしておりゃのごと送っていく」とあり、人が亡くなって出棺が行われるまでの一連の段取りとして読むことができる。従来の「死装束」では死体に「経かたびら」を着せ、「頭巾（三角巾）」を額にあて、俗説で三途の川の渡し賃と言われる「六文銭」の入った「頭陀袋」を首にかけさせるなど、色々な装束が必要だったが、現在の「死装束」には冥途の旅に出発することは考慮に入れないので、これらの装束は死後に必要とされず、故人の好んだ着衣や新しい浴衣を着せることになっている[18]。それは本文①における「新らしきもの着せる」という描写と合致している。このように、楢夫が風の又三郎に言われたことをそれぞれ死者に対して行う儀式として見立てるとそれぞれ「死装束」「湯灌」「出棺」となることがわかる。本来なら、近親者がたらいの湯で遺体を洗ってから、死装束を着せられるのであるが、楢夫の場合は逆になっている。しかし本文③の描写からわかるようにやはりこの一連の楢夫の夢の内容は葬式のそれにぴったりと合っているのである。そして、③の「みんなしておりゃのごと送って行ぐ」という台詞と呼応するかのように、兄弟の遭難のきっかけとなった、兄弟を送る父親の知りあいと途中道ですれちがった一団が「向ふから鈴をチリンチリンと鳴らしてやって」（二七六頁）くる、というように「葬送の列」を連想させるような描写がある。

このように、死を予告する「死神」のような性質を持っている「風の又三郎」の夢は、まさに「死の予告夢」である。そして楢夫の夢の話を聞いて、最初は笑って流してしまう父親も本文②においては、「顔色を青くしてそれに無理に笑って」いて、兄の一郎は「なぜか胸がつまって笑へ」なくなっている。また本文③になると、「一郎はまっ青になってだま」って、父親も「なんだか少し泣くやうに笑」うとある。天沢が指摘しているように、「不安の構造・力学とでもよぶべきもの」が作品の前半部の進行を支えているだけであれば、その恐ろしい夢における人が亡くなってから行われる一連の段取りに付合するような

描写は必要がないはずである。そして楢夫の、子どもの戯れ言のような言葉に異様に反応する父親と一郎も驚いているというよりは、むしろ深く悲しんでいるように描写されており、不自然である。特に父親の描写に注目してみると、冒頭から暗い影があることに気づかされる。次の節ではその父親の描写について考察したい。

三、思い悩む父親像

「あしたは月曜日ですから二人とも学校へ出るために家へ帰らなければならないのでした」（『校本 第七巻』二七五頁）とあることから、兄弟の父親が山小屋で一人で仕事をしており、そして子ども二人が普段は平地の実家で母親と暮らしていることがわかる。また、兄弟を実家まで道案内する父親の知りあいが、「小屋の入口で馬を引いて炭をおろしに来た人」（二七五頁）であるという描写から、兄弟の父親が製炭の仕事に従事していることがわかる。作品の同時代のコンテクストを考えてみると、宮沢賢治の出身地の岩手が当時、製鉄用の木炭の生産量が全国一を誇る地区であったことが指摘できる。北上山地、とくに下閉伊や九戸地区が代表的な製炭地帯であった。岩泉町の早野家に残された一九世紀初頭の製鉄技術書には岩窯使用による製炭法が記録されている[19]。岩手の木炭生産が質量ともに大きく発展していくことには、近代的な交通手段である東北本線の開通が大きな契機となった。明治三五年と三八年の凶作に際し、農村救済事業として木炭生産奨励が行われたこともあって、生産高は急上昇していったという。大正後期から昭和初期にかけて鉄道支線網が整備されてくると、本線から離れた地域の九戸、二戸とともに下閉伊のような地域も有力な産地になっていく。大正二年以降、山陰や南九州の進出もあったが、岩手の木炭生産高はやがて一段と上昇し、東京で消費される木炭の約半分を占めるほどに成長したのであった。

しかし、全国一の木炭生産地の背景には貧しい農村の問題があった。農林省統計表によると、昭和一〇年の専業の製炭従事者が八、七二一人だったのに対し、兼製炭業者は一九、九六二人であった。自分の山で自分で焼くという自営製炭業者はごくわずかで、その多くは、原木代金を業者などから出してもらうか、業者や山主に雇われる形で炭を焼いていた。木炭生産業者の八五パーセントは山林地主を兼ねた移出業者からの前借金で生産し生活するという状況であった[20]。副業の場合、冬季の作業となることも多く、搬出は人力による場合も多かった。現在でも北上山地のずっと奥地の山には、当時の名残として小屋と炭窯が残っている。ここで、「ひかりの素足」にもどって考えてみると、父親が一人だけで冬の山奥に小屋を構えて製炭の仕事をし、峠を越える麓には母親と二人の子どもが生活をしているという構図は、まさに当時の岩手の木炭生産におけるそれである。そして、主人公である兄弟の家庭が決して富裕ではないことが浮かび上がってくる。中地文は、「父親が炭焼きをしている「山小屋」とは別に「家」があるという設定」は「父親が

山に定住して仕事をする専業製炭者ではなく、「賃焼」として木炭移出業者に雇われた副業製炭者であることを示している」と指摘している[21]。しかし、氏は作品の冒頭部においては、「生活困窮者の子どもでありながら苦労の影が見られない」一郎と楢夫の様子が描かれていると指摘し、「大きな子」である一郎はやがて試練を受けて、〈「ほんたうの道」の探究者〉に成長していき、そしてそれとは反対に楢夫は始終純真無垢で受け身でしかなく、童心の体現者のように描かれていると論じている。そしてそれが、一郎が助かり、楢夫が死んでいく理由になると指摘している。また、千葉一幹は「ひかりの素足」に描かれている「子どもの死ぬ話」に注目し、賢治童話には「多くの登場人物が死んでいる」という童話にはそぐわない要素があると指摘しているが、そのような「子どもの死ぬ話」は「ひかりの素足」「手紙四」および「銀河鉄道の夜」といった作品に見られる。そして、その背景として、当時の日本社会に言及し「五人に一人の乳児が命を落とし、また間引きの風習も色濃く残っていたと考えられる大正時代において」こそ書かれえたものであったと指摘している[22]。中地の指摘している木炭生産業の生活困窮事情であれ、千葉の指摘している子どもが育てられない当時の日本社会であれ、あることが見落とされていることには変わりがない。その「あること」とは前節において言及したような、楢夫の恐ろしい夢を聞いて、表情が不自然に強張ってしまう父親と一郎についての描写である。

もし一郎兄弟の一家が単なる困窮家庭にすぎないとすれば、楢夫の語った「「風の又三郎」に言われたこと」に対して、父親が「顔色を青くしてそれに無理に笑」う描写や一郎が「なぜか胸がつまって笑へ」ないという描写は必要がない。不吉な夢について聞かされ、二人の気分が害されたとも見受けられる描写だが、似たような描写が後にも続く。「それがらみんなしておりゃのごと送って行ぐて云ったか」（『校本 第七巻』二七四頁）と言う楢夫に対して、一郎は「まっ青になってだまって日光に照らされたたき火を見てゐ」（二七四頁）た。そして、「お父さんはなんだか少し泣くやうに笑って／「さあもう一がへり面洗ないやなぃ。」と云ひながら立ちあが」（二七四～二七五頁）った。「泣くやうに笑って」いる父親に対する描写に注目して、作品の冒頭部を読んでみると、ところどころに怪しげな描写が目立っていることがわかる。まず、父親の登場シーンでは「顔をあげて見ますと入口がパッとあいて向ふの山の雪がつんつんと白くかゞやきお父さんがまっ黒に見えながら入って来た」（二七一頁）とある。雪の白い輝きと「真っ黒」な父親というコントラストのある登場の場面となっている。そして、兄弟二人が寝床から離れ、外に出て顔を洗ってから、もう一度小屋に入ると、兄弟の目に映ったのは「お父さんは火を見ながらじっと何か考へ、鍋はことこと鳴ってゐ」るという様子である。父親の描写が単に天沢の指摘しているような「不安の構造・力学」であるならば、父親の意味ありげな描写があまりにも強調されているように思われる。一郎兄弟の父親のような「考え事に耽る父親像」は「ひかりの素足」のほかに、同じ水脈にある「伝記群」にも

見い出すことができる。「ネネムの伝記」をはじめとする「伝記群」においても頭を抱えて悩むような父親像が描かれている。

ネネムのお父さん、森の中の青ばけものは、ある日頭をかかえていつまでもいつまでも考えていましたが、急に起きあがって、

「おれは森へ行って何かさがして来るぞ。」と云いながら、よろよろ家を出て行きましたが、それなりもういつまで待っても帰って来ませんでした。たしかにばけもの世界の天国に、行ってしまったのでした。（『校本　第七巻』二九四頁）

「ネネムの伝記」の後に改作された「ブドリの伝記」においては、次のように描かれている。「ブドリのお父さんもお母さんも、すつかり仕事をやめてゐました。そしてたびたび心配さうに相談しては、かはるがはる町へ出て行つて、やつとすこしばかりの黍の粒など持つて帰ることもあれば、なんにも持たずに顔いろを悪くして帰つてくることもありました」（『校本　第十一巻』二〇〇頁）とある。冒頭部の描写がほぼ同じである「伝記群」において、主人公の父親と母親が頭を抱えて悩む原因となっているのは、深刻な飢饉である。飢饉が起きる際に両親が頭を抱えて悩み、「たびたび心配そうに相談」する描写と主人公が年端のいかない異性の兄妹であるという設定はグリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」を想起させる。

ある大きな森の手前に、貧乏な樵夫が住つて居りました。この樵夫には、女房の外に子供が二人あつて、男の方（マヽ）の方（マヽ）はヘンゼル、女の方はグレーテルといひました。さて樵夫は、食べて行くに餘裕のない身なので、或時この土地に飢饉が起りますと、もう其日其日の食べ物にも困つて來ました。

ある晩のことでした、床に就つてから色々と考へて、心配の餘り右へ轉び、吐息をつきながら「俺等は是からどうなるだらう。子供も可哀さうに、どうして食べさせていいのか分からない、私等夫婦の食べるものもないんだから」と女房に話しました。（『グリムお伽噺講義　上巻』一六八～一六九頁）

「ヘンゼルとグレーテル」においては、飢饉を乗り越えるために継母が子どもを棄てようとするのに対し、父は渋々継母の提案を受け入れてそれを実行する。この作品のような貧しい樵の子どもたちが森で捨てられる物語について、高木昌史は「幼児期に遺棄される運命の物語は、インド、中近東、地中海沿岸から、北方ヨーロッパまで広く分布して」おり、「同じ子どもの遺棄でも、神話や伝説の名残をとどめるものから、飢饉のような歴史的現実の話まで、幅のある物語が展開されている」[23]と指摘している。そして、日本においても、柳田國男の「小兒生存權の歴史」[24]によると、食糧不足のため、子どもが生まれてすぐ捨てる習慣が行われる地方があったほど、昔は子どもを

大きく育てることが難しい場合も多かったという。現在でも続いている七日目の名づけ祝いや、生まれるとすぐに飯を炊くといった様々な儀式では、その子どもが隣人に披露されることによって子供の存在が共同体内部で「承認」された。それは子どもが簡単に捨てられることを防ぐための努力でもあった。そして大人として認められる年齢は、近年では民法制度によって高く引き上げられたが、地方によっては七歳や八歳であった。[25]

岩手は土地柄から昔から飢饉が周期的に発生する土地であった。東北地方の太平洋側では、初夏にヤマセと呼ばれる冷涼な北東風が吹き、霧や霖雨をともなって冷害をこの地にもたらし、農作物の不作が起り、歴史に残る飢饉[26]が記録されてきた。その度重なる大飢饉の土地には「人喰う風説」という悲惨な話が登場するほど生き地獄のようであった。このようなことを背景にして貧乏者の家庭では「間引き」や「子返し」といった嬰児殺しや堕胎によって亡くなる子どもが少なくなかった。明治になって東北への維新体制を強くし、そのような風習を改善するために、民生福祉面において「育子法」[27]が取り込まれたほど、子どもが育つのに困難な時代と土地であった。しかし、その政策も結局政府側の大きな赤字によって各県とも実施できず、まもなく中止となった。前述したように、グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」のように子どもが遺棄されるような物語は、イングランド、中近東、地中海沿岸から、北方ヨーロッパまで広く分布していた。冷害が発生しやすい土地柄のために試練の多かった岩手では、「子捨て」の暗喩的な描写が含まれている「ひかりの素足」のような童話が誕生したことも土地柄と無縁ではなかろう。また、「ひかりの素足」と同じ水脈にある賢治の一連の「伝記群」における、飢饉発生時に子どもを棄てるのではなく、両親が自ら森に入った後で死骸となって見つかるという設定は、「ヘンゼルとグレーテル」とは逆のパターンとなっている。

「ネネムの伝記」「グスコンの伝記」「ブドリの伝記」「黄いろのトマト」といった冒頭部の設定がほぼ同じ一連の作品に共通して見られるのは、飢饉の発生および親と子どもの離散の描写である。「黄いろのトマト」において、「ペムペルとネリは毎日お父さんやお母さんたちの働くそばで遊んでゐたよ〔以下原稿一枚？なし〕」（『校本 第八巻』一八六頁）とあるように、原稿の欠落のためにその後の両親の描写が作品から消えた理由を直接明らかにすることはできないが、「伝記群」における一連の描写の共通点から同じく飢饉の発生がその原因であろうと考えられる。また、第一節で述べたように、兄弟の名前の設定や朝起床する前に親が隣で働いている描写などが「伝記群」と共通していることから、「ひかりの素足」が「伝記群」「黄いろのトマト」と同じ水脈にある作品であると考えることができる。そうであるならば、「飢饉」の要素が描かれていない「ひかりの素足」においては、捨てられる運命の子どもであったという仮説がどのようにして成り立つのだろうか。本節において、一郎兄弟の父親像の描写には不自然なところが何箇所もあったと述べた。兄弟が一度小屋から出て再び中に入ってみると、「お父さんは火を見ながらぢっと何か考へ、鍋はことこと鳴ってゐ」（『校本 第

七巻』二七二頁）るという描写がある。この描写の直前で「火ぁ消でらたもな。おれぁ二度起ぎで燃やした。さあ、口漱げ、飯でげでら、楢夫。」（二七一頁）と父親が言ったり、「するとお父さんが鍋を少しあげながら笑」（二七二頁）ったりしている箇所からわかるように、窯の中は兄弟達の朝食であろう。そしてその後、再び、先ほど引用したように「窯」の前で「お父さんは火を見ながらぢっと何か考へ」ているという描写がある。窯の前で考え込むというのは、食糧の心配をしているからではないか。そう考えた場合、手がかりは少ないが、この作品においては飢饉が伏線になっていると考えられはしまいか。

四、「一郎」と「楢夫」――名前の設定について

一郎と楢夫兄弟の父親の不自然な挙動や「泣くやうに笑って」いるという描写は、ヘンゼル達を捨ててしまうことに躊躇する父親の描写[28]と重なる。また、前述したように、「風の又三郎」が夢の中で楢夫に告げる三つのこと――「それがらお母さん、おりゃのごと湯さ入れで洗ふて云ったか」＝死人の遺体を清める「湯灌」、「お父さんおりゃさ新らしきもの着せるって云ったか」＝「死装束」、「それがらみんなしておりゃのごと送って行ぐて云ったか」＝「出棺」――のように死者を見送る一連の儀式と符合するような描写があり、また、それを聞いて表情を変えてしまう一郎と父親の描写などから、楢夫が飢饉発生時に捨てられる予定の子どもだったのではあるまいかと考えられる。

前述したように、一郎兄弟の父親は賃金で雇われる副業製炭業者である。その場合、農業などに従事する傍らに、冬の期間を利用して家を離れて山奥で一人で重労働の製炭をせざるを得ない生活貧困者だと考えられる。そう考えると、食糧の確保のために子捨てや間引きが行われるのも想像に難くない。しかし、何故捨てられるのが一郎ではなくて、楢夫なのであろうか。そこには二つの理由が考えられる。一つは楢夫が弟であることだ。フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』[29]によれば、中世期のヨーロッパでは、一つの家庭に二人の子どもがいて、ある年齢を満たさない子どもがいる場合、他人には上の子どもしか紹介しない風習があったという。「小さな子供は死去する可能性があるゆえに数のうちには入っていなかった」とアリエスは述べ、それは小さい子のほうが「その生存の可能性が不確実な、この死亡率の高い時期を通過するとすぐに、大人と一緒にされていた」（一二三頁）からであった。子どもがある年齢に達すると共同体の一員として認められる。これは、前述した柳田の指摘のように、七歳か、八歳になると子どもの成人式が行われるという日本の昔の風習と似たようなものである。つまり、このことが飢饉発生時の犠牲者として、一郎ではなく、年少者の楢夫が選ばれる背景にあったのではないかと考えられる。

そして、一郎ではなく楢夫が捨てられてしまう理由を示すもう一つのものとしては、兄弟の名前の矛盾を挙げることができる。「ひかりの素足」に描かれているこの製炭者の男の家庭では、長男が「一郎」という名前であるのに対し、二人目の子ど

もは「楢夫」という名前であり、兄弟の名前としては不自然である。前述したように、賢治作品には兄妹（姉弟、兄弟）が登場するものが少なくない。「伝記群」のネネムとマミミ兄妹（ブドリとネリ兄妹）や「ポラーノの広場」のロザーロとファゼーロ姉弟のように、兄妹の名前には一貫性が認められる。それらと比べ、「一郎」の次に生まれた男の子が「二郎」と名付けられた場合は違和感はないが、長男の名前の「一郎」との関連性が全くないような「楢夫」という名前の設定が付けられた場合には違和感がある。一郎が雪の中で遭難する直前に次のような描写がある。

> 一郎はこのときはもうほんたうに二人とも雪と風で死んでしまふのだと考へてしまひました。いろいろなことがまるでまはり燈籠のやうに見えて来ました。正月に二人は本家に呼ばれて行ってみんながみかんをたべたとき楢夫がすばやく一つたべてしまっても一つを取ったので一郎はいけないといふやうにひどく目で叱ったのでした、そのときの楢夫の霜やけの小さな赤い手などがはっきり一郎に見えて来ました。（以下略）（『校本 第七巻』二八一頁）

ここでの「本家」について、その後には関連するような言及がないが、副業製炭業者である父親と「山の地主」との間に名子制度がある可能性も考えられる。岩手県釜石市唐丹町山谷では大本家が別家・分家・親類・縁者を統率して命令・伝達・納税通知など一切を取り扱っていた。また、五月の節句の朝や年越しの食事は、本家が食事をとらないうちは別家や分家でも箸をとらず、本家で食事するのを見届けて、次男、三男がそれを注進するというように行われたという[30]。遭難直前に一郎の脳裏をよぎった正月についての回想シーンには、分家の身分であるにもかかわらず、楢夫が人目を憚らずみかんをたべてしまうという描写がある。兄の一郎が厳しい上下関係を意識して肝を冷やしているのに対して、弟の楢夫にはまだその分別がない様が描かれている。また、生まれた子供の名付けについても、すべて本家中心に行われたこともある。それが一郎と楢夫との名前に関連性がない理由の一つと考えられる。また、東北には土地も家屋敷も所有していない貧農と地主の間には、厳しい階級制度として名子と旦那の名子制度があった。この制度は昭和の中ごろから崩れ始めたが、今でも旦那という観念から抜け出せない村落がある。ある地主が貧農の若者や娘を住み込ませて結婚させ、分家にすることもある。肉身のカマド（分家）に対してこれを名子カマドと言う[31]。もしくは、二人の子どもがともによそからもらってきた子どもである可能性もあるが、兄の名前が「一郎」であることから、養子として迎えられたのが「楢夫」の方である可能性が高いだろう。また、言及の少ない「母親」と「父親」の関係においては、再婚の可能性が考えられる。深沢七郎『楢山節考』においては、主人公の老婆おりんが山に捨てられる直前まで息子の後妻の問題について心配していたが、ある日、亭主が死んで三日もたたないうちに、向こう村の

後家が縁談の話を持ち出していると飛脚から伝えられるという描写がある。このように、「ヤモメ」と「後家」が結婚するのは貧乏な地域における〈自然〉なことであったのだ[32]。「ひかりの素足」における主人公兄弟の両親がこのような再婚した夫婦である可能性を考えるならば、一郎と楢夫がそれぞれの連れ子である可能性も大きくなる。その場合、もともと血縁関係のない兄弟である二人に関連性のない名前が付けられていることにもそれほど違和感がないだろう。

山小屋から実家に戻るこの道程で楢夫がもともと捨てられる予定であったと考えるならば、楢夫の「死の予告の夢」を聞いた際に父親と一郎の表情が強張って、顔色を変えてしまうという描写も自然なものになる。一郎が楢夫の夢を聞いた当初から、「ぞっとしてしま」ったり、「胸がつまって笑へ」なくなるのは、おそらく「ヘンゼルとグレーテル」の兄のヘンゼル同様、事前に父親と母親の相談を聞いてしまったのだと考えられる。

五、案内者の男と度々振り返る一郎

「ヘンゼルとグレーテル」と「ひかりの素足」においては、貧困のために子どもたちが両親に遺棄されるというのが共通する設定であるが、遺棄された後の子どもの行方がそれぞれで異なっている。前者においては、ヘンゼルとグレーテルの兄妹が魔女のいる森に迷い込んでしまう。そして後者においては、一郎、楢夫兄弟が雪に埋もれて気を失ってしまうが、もう一度目が覚めると「うすあかりの国」にいることに気づく。このように両作品ともに、遺棄された子供が元の世界（「両親と住んでいる村」、「母のいる家への帰り道＝峠」）から、異世界（「魔女のいる森」、「うすあかりの国」）へ行くという構図が見られるが、子どもたちが二つの世界を行き来する際に、「鳥」の描写が大きな役割を果たしている。次は「ヘンゼルとグレーテル」及び「ひかりの素足」における「鳥」の描写について検証したい。

「ひかりの素足」において、楢夫が遭難する要因には天候の要素があるだけではない。楢夫が貧しさのために「捨てられる」子どもだったとすれば、この作品には原型としてグリム童話「ヘンゼルとグレーテル」の要素があるのではないかと考えられる。一郎と楢夫が父親の山小屋から旅立ち、山の向こうにある実家へ戻る間の描写と、「ヘンゼルとグレーテル」の兄妹が家から森に入っていく描写（父親が継母に子捨てをするようにと説得され、兄妹を森へ連れていって捨てようと企む場面の描写）とを合わせて見てみよう。「ヘンゼルとグレーテル」においては、兄のヘンゼルが両親の計画を前夜に聞いてしまったために森に向かい、「ヘンゼルは立止つて家の方を振返」（一七三頁）り、「何遍も何遍もさうするのですから父は「ヘンゼル、お前何を見て遲れるのか、氣を付けてサッサと歩きな」」（一七三頁）と怒った、という描写がある。ヘンゼルは「お父さん、僕ね、僕の白い猫を見てゐるの」（一七三頁）と言い訳をし、「その實猫の方を見てゐた譯ではありませぬ、衣嚢の中からピカピカ光る例の小石を取り出して、それを一つづゝ道へ撒い」（一七三頁）て、まっすぐ森から

家に帰ることができるように道しるべを作ったのであった。ここで「ひかりの素足」を見てみると、兄の一郎の場合にも、帰途につく際に歩いてきた道を度々振り返って見るという描写がある。

> 楢夫はもう早くうちへ帰りたいらしくどんどん歩き出し一郎もたびたびうしろをふりかへって見ましたが馬が雪の中で茶いろの首を垂れ二人の人が話し合って白い大きな手甲がちらっと見えたりするだけでしたからやっぱり歩いて行きました。（『校本 第七巻』二七七頁）

右は一郎が「振り返る」描写が本文に最初に登場する場面である。ここでは、父親の代わり（傍点頼、以下同）に帰り道の案内をしてくれるという、父親の知りあいが、途中で道ですれ違った人と長話を始めたため、一郎と楢夫が待ちきれずに先に歩き出してしまう。それでも案内者の男を気にしてしまう一郎は「たびたびうしろをふりかへって見」る。目指している家は「一里もない」「あとはもう峠を一つ越えればすぐ」（『校本 第七巻』二七七頁）だが、予想以上に道が長い。雪がだんだんと勢いを増して降り続き、怖くなった楢夫が泣き出すと、「「疲（こわ）いが。」一郎もはあはあしながら云ひました。来た方を見ると路は一すじずうっと細くついて人も馬ももう丘のかげになって見え」（二七七頁）なくなったのだった。そして、兄弟が遭難する直前に、「一郎はふりかへって見ました。二人の通って来たあとはまるで雪の中にほりのやうについてゐ」（二八一頁）るというように、兄弟が案内者の男を後にして歩き出した後に、一郎が来た道を何べんも振り返って見るという描写が繰り返されている。

このように、母のいる平地の家まで「もう峠を一つ越え」るほどすぐ近くに来たので、長話をする案内者の男を置いて、兄弟二人は先に旅立つことにする。それは裏を返せば、後少しで家に着くにもかかわらず、案内者の男を待たないで先に立たないといけないほどの事情があるのだと思われる。冒頭での一郎と父親のあまりにも不自然な描写を考慮に入れると、死の予告の夢を見た楢夫が捨てられる予定の子どもであるのであれば、一郎が「ヘンゼルとグレーテル」のヘンゼルのように、両親の計画を聞いてしまった可能性がある。そのために楢夫の恐ろしい夢の内容を聴いて、一郎が驚いてしまうのだ。そして父親の代わりに道案内をする父親の知りあいの男には、父の代わりに子捨て（楢夫を捨てること）を実行する役割があるだろう。その男は「小屋の入口で馬を引いて炭をおろしに来た人」で、つまり父親の同業者の人である。また、「その人は牽づなを持ってあるき出し鈴はツァリンツァリンと鳴り馬は首を垂れてゆっくりある」（同前、二七六頁）く場面と、兄弟の遭難のきっかけとなった、男と長話をする「向ふから鈴をチリンチリンと鳴らしてやって」（同前、二七六頁）くる一団と遭遇する場面がある。この二つの場面の、「鳴らす鈴の音」が「葬送の列」を連想させて、楢夫の死を予告するような描写になっている。つまり、案内者の男が引いている馬が「鈴はツァリンツァリン」と鳴らすとい

う描写からわかるように、案内者の男が楢夫に死を与える「死神」のような人物であることが暗示されているのだ。楢夫に死を与えるかもしれない男から逃れるために、家まであと少しもないにもかかわらず、一郎はその男が長話をしている最中に、楢夫を連れ出して逃げてしまう。しかも、連れ出す際に、「たびたびうしろをふりかへって見ましたが馬が雪の中で茶いろの首を垂れ二人の人が話し合って白い大きな手甲がちらっと見えたりするだけ」（二七七頁）というように一郎が男が話しているのを確認する場面には、男に対する一郎の恐怖心が表れていると言ってもよい。そして歩いていく途中でも、その恐ろしい計画を実行する案内者の男が追ってくるのではないかと一郎が「たびたびふりかえ」るが、一郎の焦る心のためにかえって、二人は雪の中で遭難してしまうのだ。

六、「鳥」の描写について

前節において、一郎が度々「来た方」を振り返るという描写と、「ヘンゼルとグレーテル」の兄のヘンゼルが捨てられることを先に予知し、森へ向かう途中で家に戻るための道しるべを残しながら度々振り返る描写が重なることを指摘した。また、「ヘンゼルとグレーテル」においては、兄弟を森へ連れていって捨てる役目が父親にあるのに対して、「ひかりの素足」においては、その役目が父親の代わりである同業者の男にあることがわかる。

ところで、現在最も流通している「ヘンゼルとグレーテル」のバージョンには、初版本とはかなりの差異がある。『グリム童話集』は、一八一二（文化九）年に初版第一巻が刊行され、その後、版が重ねられ、一八五七（安政四）年に兄弟の生前に最後の版である第七版が出されたという。一八四〇（天保一一）年の第四版において、実母が継母に改定され、二羽の白い鳥と大きな川が登場する場面が新たに書き加えられている。今日、一般に『グリム童話集』として読まれているのは、この第七版であるが、この第七版と初版にはいくつかの異同があり、その最も大きな差異の一つとしては、第七版において書き加えられた二羽の白い鳥を挙げることができるだろう。

> 其日のお晝頃でした、一羽の美しい、雪のやうに真ッ白な小鳥が木の枝にとまつてゐて、大層いゝ聲で歌つてゐましたから、二人は立止つて聞いて居りました。（『グリムお伽噺講義 上巻』一八三頁）

大正期に流布しているグリム童話には、初版にはない要素として二羽の鳥が登場していることから、それが第七版の翻訳であることがわかる。一羽は、森に置き去りにされたヘンゼルとグレーテルを三日目に魔女のお菓子の家へと道案内する「雪のように白い小鳥」であった。もう一羽は、魔女の家から逃げだしたふたりが魔女の森から出るのを阻んでいる大きな川を渡してくれた「白いカモ」（「entehen」）[33]である[34]。二匹目の鳥「カ

モ」は西洋の魔法昔話ではしばしば恩返しをする、あるいは援助をする動物として描かれている。フィンランドの叙事詩「カレワラ」では、世界は鴨の卵から生まれたという。また、昔話では、死者の灰から生まれた霊鳥として、バルト語圏のメルヘンに時折登場する[35]。鴨はこのように、「死者の灰から生まれた霊鳥」と定義されたりもする鳥であるが、「ひかりの素足」に登場する「鳥」にはどのような意味があるのだろうか。作品には鳥が主人公の兄弟の頭上をよぎっていく描写が五箇所にもある[36]。冒頭部においては、鳥の鳴き声で一郎の眼が醒めるという描写がある。兄弟が山小屋を離れ、家の帰り道に辿る最初の風景描写は以下のようである。

> みちはいつか谷川からはなれて大きな象のやうな形の丘の中腹をまはりはじめました。栗の木が何本か立って枯れた乾いた葉をいっぱい着け、鳥がちょんちょんと鳴いてうしろの方へ飛んで行きました。そして日の光がなんだか少しうすくなり雪がいままでより暗くそして却って強く光って来ました。(『校本 第七巻』二七六頁)

ここにおける「象のやうな形の丘」について、鈴木健司は、「首から上が象の形で、下が人間の姿をした」悪鬼神の「昆那夜伽天」の住む「象頭山」のことであり、賢治にはその知識があったと述べている[37]。また、関口安義は「峠や丘は、異空間への通路として考えられている」[38]と指摘している。鈴木が指摘しているように、「象のやうな形の丘」が仏教で説かれている「象頭山」に由来していることは間違いないだろうが、遠野地方に「象頭山」と関係のある地名として、「ジャウヅカ森」に触れないわけにはいかない。

柳田國男の『遠野物語』(第一一三話)には「和野にジャウヅカ森と云ふ所あり。象を埋めし場所なりと云へり。此所だけには地震なしとて、近邊にては地震の折はジャウヅカ森へ遁げよと昔より伝へたり。此は確かに人を埋めたる墓なり。塚のめぐりには堀あり。塚の上には石あり。之を掘れば祟ありと云ふ」(『遠野物語』四七頁)とある。また、この「ジャウヅカ」については、「境の神を祀りし所にて地獄のシャウツカ(マ)の奪衣婆(マ)の話などと關係あること石神問答に詳にせり。叉象坪などの象頭神とも關係あれば象の傳説は由なきに非ず、塚を森と云ふことも東國の風なり」(四七頁)とある。鈴木が指摘している「象頭山」は遠野市土淵町和野に所在している「ジャウヅカ森」(「象を埋めし場所」、「人を埋めたる墓」)として名づけられている場所ではないかと考えられる。東北出身の賢治がその地域の地理に詳しいのは当然だろう。そして、このジャウヅカ森の近くには、昔、囚人の処刑場だった「ダンノハナ」があり、その地域の近くには、本論の冒頭でも触れた「姥捨て」の風習があった「デンデラ野」(「蓮臺野」)があった。このように、関口が指摘しているような「異空間への通路」としての「象のやうな形の丘」は、「ジャウヅカ森」(「象の埋めし場所」、「人を埋めたる墓」)という空間にあり、そしてその背景には「ダンノハナ」「デンデラ野」

といった老人を棄てることに因縁深い地域があったことがわかる。

また、『遠野物語拾遺』（初出は郷土研究社、昭和一〇年。本稿では『遠野物語』（角川書店、昭和五三年二月）による）の第二六六話によると、デンデラ野の「雑木林の中には十王堂があって、昔この堂が野火で焼けた時十王様の像は飛び出してすぐ近所の佐々木喜平どんの家でやっているが、村じゅうに死ぬ人がある時は、あらかじめこの家にシルマシがあるという。すなわち死ぬのが男ならば、デンデラ野を夜なかに馬を引いて山歌を歌ったり、または馬の鳴輪の音をさせて通る」（二八〇頁）という。「ひかりの素足」において、案内者の男が引く馬が鈴を「ツァリンツァリン」と鳴らせながら峠を通るという描写には、馬の鳴輪の音をさせながらデンデラ野を通る人が現れると村の男に死人が出るという民俗学的な背景があったのではないかと考えられる。以上のように、「馬を引く男」の牽引の後に一郎と楢夫が「象のやうな形の丘」で吹雪に遭ってしまうが、その場所は「ジャウヅカ森」（象坪）という「人を埋めたる墓」であり、またその近辺に「姥捨て」の地として有名な「デンデラ野」があることを踏まえると、楢夫が最初から捨てられる予定の子どもであったという仮設の信憑性が一層強まってくるのではないか。

また、天沢は「ひかりの素足」に登場する枯葉をつけた栗の木が死と眠りのモチーフとして重要であると指摘し、この描写の直後に登場する「鳥がちょんちょんと鳴いてうしろの方へ飛んでい」く描写では鳥が「子どもたちの行く手の方からいまきた方へと、あたかも何かを恐れるように逃げてきて、こどもたちをいまは見棄てるとでもいうよう」（「峠を登る者」二一～二二頁）であると述べている。このように、「ひかりの素足」において、子どもたちの「守護者」である鳥たちが子どもと反対側に飛んでいくという描写は、「天候の悪化・激変の殆ど直接的な予告」として指摘されている（天沢、二二頁）。しかし、この後にも鳥の描写が繰り返し登場する。

（前略）けれども楢夫はその丘の自分たちの頭の上からまつすぐに向ふへかけおりて行く一疋の鷹を見たとき高く叫びました。

「しぢ、鳥だ。しゅう。」一郎はだまってゐました。けれどもしばらく考へてから云ひました。

「早ぐ峠越えるべ。雪降ってくるぢょ。」（『校本　第七巻』二七八頁）

「しぢ、鳥だ。しゅう。」とはしゃいで、叫んでいる楢夫に対し、一郎はしばらく黙りこみ、「早ぐ峠越えるべ。雪降って来るぢょ」と何かを予感したかのように道を急ぐ。ここでは、兄弟が雪の中で遭難することの伏線がすでに敷かれている。実際に兄弟の遭難が描かれるのはこの「鳥」の描写の後である。「鳥」が空を飛んでいく描写が賢治作品においてどのような意味を持つかは詩「白い鳥」（「無声慟哭」の詩群の一つで、詩集『春と修羅』（關根書店、大正一三年四月）所収）を合わせて読むとはっきりする。

（前略）二疋の大きな白い鳥が
鋭くかなしく啼きかはしながら
しめつた朝の日光を飛んでゐる
それはわたくしのいもうとだ
死んだわたくしのいもうとだ
兄が来たのであんなにかなしく啼いてゐる（以下略）（『校本 第二巻』一四八～一四七頁）。

宮沢健太郎は詩「［北上川は熒気をながしぃ］」における、かわせみによる魚の受難と、キリストの受難とが重ねて描かれている部分には、鳥などになって遍在するキリストのような存在として、トシを捉えたいという賢治の思想があるとキリスト教的な解釈をしている[39]。氏が指摘しているのは妹のトシが「鳥として遍在」し、そこにはキリスト教の信仰という性格があるということである。しかし詩篇「白い鳥」を合わせて読むと、亡くなった妹が鳥になるという描写は、キリスト的な教義と関連しているというよりは、むしろ、古来の日本人の心の信仰に近いものであると言わざるを得ない。「白い鳥」の後半部においては、再び鳥の描写が登場する。

そのかなしみによるのだが
またほんたうにあの声もかなしいのだ
いま鳥は二羽　かゞやいて白くひるがへり
むかふの湿地　青い芦のなかに降りる
降りやうとしてまたのぼる
（日本武尊の新しい御陵の前に
おきさきたちがうちふして嘆き
そこからたまたま千鳥が飛べば
それを尊のみたまとおもひ
芦に足をも傷つけながら
海べをしたつて行かれたのだ）（『校本 第二巻』一五〇頁）

ここでは日本武尊の死を妃たちが悲しんでいたところ、鳥が飛んできたので、妃たちはその鳥には尊の魂が宿っていると信じ、足を芦で傷つけながらもその鳥を追って行くという描写がされている。この情景では、折口信夫が指摘しているような、古来から人の死後の魂が鳥に宿るさまが描かれている。

（前略）或は、出雲人の間では、いろんな鳥が葬式に奉仕したといふ傳へがあります。天稚彦が死んだ時に、海の鳥、河の鳥、いろんな鳥が出て來るといふことになつて居ませう。鳥といふものは、魂を保留して居るのです。ですから、人が死んだといふと、鳥が集つて來ます。其が神話になつて來ると、鳥が葬式に仕へるといふことになるのです。[40]

詩篇「白い鳥」の後半部で歌われている「日本武尊」は、兄の大碓皇子に代わって、出雲、熊襲、蝦夷の討伐を命じられ出征し、最後は能褒野で命を落としてしまう。死後の皇子は八尋白智鳥（大きな白鳥）と化して天に昇り、葬を営む后や御子たちがその後を泣きながら追ったという[41]。賢治は、尊の姿が鳥に化けて妃たちの前に現れたことをもとに、この詩を歌っているのだ。詩の前半に登場する「二疋の大きな白い鳥」が「わたくしのいもうと」の変身したものであり、「兄が来たのであんなにかなしく啼いてゐる」のだ。そして、二疋の鳥が妹の化身であると思うこと自体が「（それは一応まちがひだけれども／まつたくまちがひとはいはれない）」（「白い鳥」一四九頁）とあるように、鳥が妹の化身であることを信じたいという強い意志が歌われている。ここで注目すべきなのは、死者である妹が鳥になった姿を見ることができる詩人とは、死者と同じ空間にいる存在であるということだ。つまり、詩人はこの「鳥」の飛んでいる「空の空間」＝「死者の空間」に存在しているのである。それは「二疋」の白い鳥が死んだ妹のトシと詩人自身のことを指しているからである。

「鳥」が飛んでいる「空の空間」＝「死者の空間」の描写は賢治のほかの作品にも登場する。「銀河鉄道の夜」の結末部では、主人公ジョバンニと一緒に夢の中で銀河鉄道に乗って旅をしていた親友のカムパネルラが、実は川で溺れてしまっていたということが明かされる。そしてその事実を知ったジョバンニの様子は以下のようである。

> 下流の方の川はゞ一ぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのまゝのそらのやうに見えました。
>
> ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはづれにしかゐないといふやうな気がしてしかたなかったのです。（「銀河鉄道の夜」『校本 第十巻』一七〇頁）

カムパネルラは川の底で溺れてしまうが、「川」を媒介にして、ジョバンニは「川」を空と見なし、その空にいつまでも死者のカムパネルラがいるような気がしてしまう。天沢退二郎は別役実との対談[42]の中で、原稿に「川、ながれるあかり」と書き込まれていたことを根拠にして、汽車が野原を流れる川の水面に映った可能性があると指摘している。つまり、ジョバンニが銀河鉄道の汽車に乗車する直前に見た汽車とは、川に映った汽車の影なのだというのである。まとめてみると「銀河鉄道の夜」において、「川」とは「水のないそのまゝのそら」であり、ジョバンニと死者のカムパネルラが旅をしていた空間なのである。そしてここでもやはり鳥が飛んでいく描写がある。銀河鉄道の汽車がジョバンニの前に忽然と現れる直前に、一匹の鳥がジョバンニのいる丘の上空を飛んでいく描写がある。

> その真っ黒な、松や楢の林を超えると、俄かにがらんと空がひろけて、天の川がしらしらと南から北へ亘ってゐるのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。

つりがねさうか野ぎくかの花が、そこらいちめんに、夢の中からでも薫りだしたといふやうに咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通って行きました。（『銀河鉄道の夜』『校本 第十巻』一三三頁）

このように、主人公が死者と出会う場面の直前には上空を飛んでいく鳥の描写がある。これは「銀河鉄道の夜」や「ひかりの素足」、詩篇「白い鳥」にも共通する描写であろう。「ひかりの素足」における「鳥」は、天沢が指摘しているような悪天候を予知する存在であるというより、空を飛んでいく鳥のいる空間には主人公と死者の出会いの場が用意されていると言ったほうがよかろう。「ひかりの素足」においては、「その丘の自分たちの頭の上からまっすぐに向ふへかけおりて行く一疋の鷹」（『校本 第七巻』二七八頁）が登場した後、一郎と楢夫の兄弟が雪の中で遭難し、一郎が再び目を覚ますと、そこは「うすあかりの国」であった。そこで一郎は自分の足が知らない間にひどい怪我をしていることに気づき、楢夫が獄卒らしき鬼に追われているところを目撃してしまう。その後、巨きな白い人が現れ、楢夫が死後に世界に行き、一郎だけが助かって元の世界に帰るという展開になる。注目すべきなのは兄弟が「うすあかりの国」に行く前に丘の上空を一匹の鷹が飛んでいく描写と、「銀河鉄道の夜」における、ジョバンニとカムパネルラが銀河鉄道の汽車に乗車する前に、ジョバンニのいる丘の上に「鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通って行」くという描写とが重なっていることである。つまり、のちに生還する主人公が死者となる人物のいる空間に入るためには、「上空を飛んでいく鳥」を媒介にしなければならないのだ。また、一郎が「うすあかりの国」で眼が醒めると足がひどく負傷しているという描写は、詩篇「白い鳥」にある、鳥になった故人の魂を追って海を渡る時に芦で怪我をしてしまう描写と重なっているのではないかと考えられる。一郎の足の傷跡には、死者である楢夫に対する強い思いが表れている。

七、「ヘンゼルとグレーテル」と「ひかりの素足」の差異――二つの世界をめぐって

この節では再び、「ヘンゼルとグレーテル」と「ひかりの素足」の比較に戻りたい。「ヘンゼルとグレーテル」における二羽の「鳥」の描写に注目してみると、一羽目の雪のように白い鳥が森の中で迷子になった兄妹を魔女の家まで案内する役割を果たし、そして二羽目の鴨が、兄妹が森から家に戻る際、途中の川を渡る時に橋の代わりの役割を果たしていることがわかる。このように、魔女の家に行く際に、そしてそこから離れる際にも、「鳥」が二つの世界を繋ぐ「橋」のようなメタファーで描かれている。この作品においては、「橋」の「こちら」にあるのがヘンゼルとグレーテルのいる世界であり、そして「向こう」にあるのが魔女のいる世界であるという構図がある。魔女の棲んでいる森について、西村佑子は、キリスト教の信仰が

人間中心主義的な信仰であるのとは異なり、古代のドイツ人は自然を信仰してきたと指摘し、森は「ドイツの美しい森などとは縁遠い、人も住まぬ危険な場所」[43]と見なされてきたと指摘している。森が文化を妨げるものだというキリスト教の文化観が中世時代に広まりはじめると、森の開墾が奨励されるようになったが、依然としてドイツの村には原生の森があった。魔女とは「垣根を越えゆく人」（西村、五八頁）であり、村民の記憶から消され、人知れず森に棲みついているとされていた。このように、「ヘンゼルとグレーテル」の新版における二羽の鳥は、子どもたちを魔女のいる世界へと運び、そこから帰還させる役割を果たしている。

一方、「ひかりの素足」における「鳥」の描写で注目すべきなのは、上空を飛んでいく「鳥」の存在であり、その鳥が飛んでいる「空の空間」は、詩篇「白い鳥」や「銀河鉄道の夜」を合わせて読むと、「死者の空間」でもあることがわかる。上空を飛んでいく鳥の描写の後に、主人公が死者のいる世界に入っていくという点からすると、「ひかりの素足」における「鳥」には「ヘンゼルとグレーテル」の場合と同様に、二つの世界を繋げる「架け橋」のような役割があり、前者の鳥は「峠」と「うすあかりの国」を繋げており、後者の鳥は「村」と「魔女のいる森」を繋げている。しかし、両者の間にある決定的な違いとは、「ヘンゼルとグレーテル」において二つの世界が両方とも「生」の世界であるのに対し、「ひかりの素足」においては一方が「生者」の世界で、もう一方が「死者」の世界であるということだ。

また、「ヘンゼルとグレーテル」においては、兄妹は魔女が人食いの魔女であることに気づき、竈まで誘導してその中に閉じ込めて魔女を焼死させる。兄妹は魔女を殺してしまうだけではなかった。魔女の家には「彼方の隅にも此方の隅にも、真珠や寶石を入れた箱」（一九五頁）があり、それをあさり、魔女の財宝まで持って行ってしまう。このように、子どもたちは「こちら」の世界から「あちら」の世界へと行き、「あちら」の世界のすべて（住人の魔女や財宝）を破壊してしまう。この作品においては「こちら」の世界と「あちら」の世界の共生はあり得ない。

一方、宮沢賢治の場合、一郎は死者の国である「うすあかりの国」へ行き、そこで死んでしまった楢夫と共に苦しみを味わう。吉本隆明は、賢治作品の底流に流れているのは「橋の思想」であると指摘している[44]。昔話における「橋の夢」には、「瀕死の意識不明の状態に現れてくる橋の向こうに渡れないとか、渡らないで引き返した途端に眼が醒めて助かった」（『宮沢賢治の童話について』『宮沢賢治の世界』一九頁）というパターンが多いが、その場合、橋を一旦渡ると助からないという。そして吉本は、賢治の「銀河鉄道の夜」が民俗性・伝承性に対して特異性を持っている点としては「向こうまで非常にスムーズに行ってしまうこと」を挙げることができ、「引き返したわけではなくて、渡ったところで非常にスムーズにジョバンニの現実と接続されている」（二一頁）ところに特徴があると述べている。つまり、

賢治作品と昔話の話型との決定的な違いとは、賢治作品では「こちら」の世界と「あちら」の世界との間を順調に行き来できるという点にあるのである。今まで述べてきたように、詩篇「白い鳥」には、死者となった妹が鳥になって会いに来るという描写があるが、詩人が、死者となった妹の化身である鳥を見ることによって、詩人のいる「生の空間」の内部に「死の空間」が発見され、詩人はすんなりと死者のいる空間に入ってしまうのである。「銀河鉄道の夜」や「ひかりの素足」においても、空を飛んでいく鳥の描写の後で、生者の主人公が死者のいる空間へと入っていく。そしてその上空を飛んでいく鳥には詩篇「白い鳥」の場合のような、死者の化身としての意味合いがあるのだ。言いかえれば、死者の化身である鳥が上空を過ぎ去っていくとともに、生者の世界はただちに死者の世界と繋がり、すんなりと「死者の世界」に転換できるのである。「生者の世界」に「死者の世界」があり、もしくは逆に「死者の空間」に「生者の空間」があるという二つの世界の共存は賢治作品の特徴なのではないかと考えられる。

八、終りに

「ひかりの素足」の後継テクストとされている「青森挽歌」(45)において、「何故通信がないのか」(『校本 第二巻』一六一頁)とあるように、亡くなった妹との通信を願っているさまが描かれている。ここで注目すべきなのは、妹との通信を願っているくだりの前で妹が鳥に変身する場面である。

(前略)そしてそのままさびしい林のなかの
いつぴきの鳥になつただらうか
I'estudiantina を風にきながら
水のながれる暗いはやしのなかを
かなしくうたつて飛んで行つたらうか
やがてはそこに小さなプロペラのやうに
音をたてゝ飛んできたあたらしいともだちと
無心のとりのうたをうたひながら
たよりなくさまよつて行つたらうか(『校本 第二巻』一六一頁)

そして、その後、詩人が「大循環の風よりもさはやかにのぼって行った」(『校本 第二巻』一六二頁)とある。吉本によれば詩人の行った場所とは、天親の『往生浄土論』に描かれているような死後の世界であり(「宮沢賢治の世界」『宮沢賢治の世界』五六頁)、またそこで詩人は鳥になった妹のたどり着く世界を想像して描いている。

巨きなすあしの生物たち
遠いほのかな記憶のなかの花のかほり
それらのなかにしづかに立つたらうか
それともおれたちの声を聴かないのち
暗紅色の深くもわるいがらん洞と

意識ある蛋白質の砕けるときにあげる声
亜硫酸や笑気のにほひ
これらをそこに見るならば
あいつはその中にまつ青になつて立ち（以下略）（『校本　第二冊』一六二～一六三頁）

右の描写は地獄の風景を描いたもののようだが、「意識ある蛋白質」、つまり人間や動物といったものの死後に肉体が「砕けて」いき、腐敗してしまう過程を詩人が描写しているのだと言ってよい。それと同時に、「（わたくしがいまごろこんなものを感ずることが／いつたいほんたうのことだらうか／わたくしといふものがこんなものをみることが／いつたいありうることだらうか）」（『校本　第二巻』一六三頁）とあるように、括弧の中の文章では、死後の世界を感じたり、見たりすることに対して懐疑的な態度を抱いていることが表現されている。「青森挽歌」全篇を含む賢治の詩全体を通して言えることだが、このような詩の語りの後にその語り自体を否定する言葉を括弧の中に入れるパターンが見られる。このような注釈のようなものを挟んで詩の流れを切ってしまう賢治の詩作について、吉本隆明は、「流れを切ってもそういう言葉を差し挟まざるをえないというのが宮沢賢治の中にあって、それが宮沢賢治の本質的なところ」（「エリアンの詩とうた」『宮沢賢治の世界』一〇九頁）であると指摘している。このように、自己主張しながらすぐそれを否定する態度には、賢治の心の迷いが表れている。そのことについて渡部芳紀は「宗教者としての賢治は、としは敬虔な信仰者であったのだから幸せな世界に転生したに違いないと思い、科学者としての賢治は、科学的に考えると死ねばただ物質的に消滅していくだけだ」[46]と述べている。この二律背反を含んだ描写では、詩人にとって、「トシ」の死という事実がいかに受け入れがたいことであるかが表現されている。科学的には死後の世界は存在しないと思いながらも、妹の死後の世界をどうしても想像したい詩人が、亡くなって鳥として天に登った妹とともに天に登ってそして詩人自身もそのまま一緒に登って行き、死後の世界を描いたのである。同じ構図を持つ「青森挽歌」や「銀河鉄道の夜」「ひかりの素足」においては、死者がこの世からいなくなり、不在のものになるが、鳥に変身して現前化する。そして死者の代わりとなる鳥が「生の世界」に現前化することによって、主人公（詩人）のいる「生の世界」の内部に「死の世界」が発見され、そこで主人公は死後の世界を見たり、感じたりすることができるのだ。その点に留意した場合、「ひかりの素足」において、一郎が遭難した場所から「うすあかりの国」の場面へと描写が転換される際には、登場人物が移動していく描写がないことが分かる。そして、そこには兄弟二人が一緒にいるのではなく、気が付いたら「楢夫もそばに居なくな」り、一郎が一人だけでいる様子が描写されている。また、一郎が鬼に追われる楢夫を見兼ねるという描写や楢夫とともに足にひどい怪我をする描写などはまさに、主人公が死者の世界の内部で死者の経験を体験していることの証拠である。「ヘンゼルとグレーテル」

には、二つの世界を繋ぐ存在として「鳥」が登場したが、最終的には繋がれた二つの世界の間の交通は維持されるのではなく、破壊されてしまう。一方で、死者との交信を図る賢治文学においては、亡くなった死者がこの世から消えて、不在のものとなってしまっても、その化身である鳥が現前化することによって、生者が死者の世界の内部にすんなりと移動することができたのである。もっと正確に言えば、賢治文学の場合、生者が死者の世界に移動すると言うよりは、想像の世界で死者の世界が生者のいる空間の内部に現れるのである。そのために死者の化身である「鳥」の描写が必要だったのであろう。「ひかりの素足」において、父親の不自然な行動や葬式を連想させるような「風の又三郎」の夢についての語りなどから、この作品にはグリム童話「ヘンゼルとグレーテル」のような「子捨て」の要素があることを論じたが、子どもが捨てられた後の行方が重要である。つまり、もともといた世界と、辿りついた世界という「こちら」と「あちら」の世界の二項対立的な枠を超え、生者の世界に死者の世界が現れるという点こそが「ひかりの素足」だけではなく、賢治作品全体における最も大きな特徴だと言うべきなのである。

※　文献などの年時表記は、日本における時代感覚の把握の上から、便宜的に元号を用いた。

※　本稿では、宮沢賢治に関する本文、年譜、校異などの引用は全て『校本宮沢賢治全集』（筑摩書房、昭和四八～五二年）に拠る。引用に際しては『『校本　巻号』』と略記する。

【注記】

1　「蓮臺野」と書いて、「デンデラ野」と読む。青笹村（昭和二九年まで岩手県上閉伊郡にあった村。現在の遠野市青笹町青笹・青笹町中沢・青笹町糠前にあたる）の字糠前と字善応寺との境あたり。

2　グリム童話はドイツ語の原名、「Kinder-und Hausmärchen」の頭文字をとって、ＫＨＭと略記するのが通例となっているので、それに従うことにする。

3　杉浦静「ひかりの素足」（『国文学解釈と教材の研究　宮沢賢治の全童話を読む」第四八巻三号、平成一五年二月臨時増刊号）一四九頁

4　童話「グスコンブドリの伝記」は以下、「グスコンの伝記」と略記し、童話「グスコーブドリの伝記」は以下、「ブドリの伝記」と略記する。なお、主人公の名前も同様で、グスコンブドリは以下、「グスコン」と略記し、グスコーブドリは以下、「ブドリ」と略記する。

5　この部分は、「児童文学」第二冊（文教書院、昭和七年三月一〇日）に発表された際に、紙面上の制限のために削られた部分である。

6　鈴木健司「《象の頭のかたちをした丘》について」（『宮沢賢治　幻想空間の構造』蒼丘書林、平成六年一一月）二六六～二六八頁

7　分銅惇作「ひかりの素足」――浄土のイメージについて――」（『国文学解釈と鑑賞」第四九巻一三号、昭和五九年一一月）八〇頁

8　同注3、杉浦静「ひかりの素足」一四九頁

9　虎頭恵美子「日本におけるグリム翻訳書誌――明治期のグリム童話の本邦初訳について――」（川戸道昭他編『日本におけるグリム翻訳書誌』ナ

ダ出版センター、平成一二年七月）

10　山田史子「日本におけるグリム・メルヘン受容」『研究年報』慶応義塾大学、平成一六年）六九頁

11　金田鬼一によるグリム童話集の完訳は現在岩波書店（昭和五四～昭和五六年）から出版されている。

12　須田康之「日本におけるグリム童話の受容と変容」（『教育社会学研究』第四九集、日本教育社会学会、平成三年一〇月）一一八頁

13　杉浦静は宮沢賢治の手書き原稿の「お」という字体の変化について、点が離れているかどうかが作品の成立時期を判断する際のてがかりの一つになると指摘している。それは、①点が離れている大正一一年一一月までの時期と、②点がくっついている書き方が現れる大正一二年以降の時期での区分である。そして「ひかりの素足」のA、B、Cの三種の現存原稿においては、AおよびBが①の時期に、Cが②の時期にあたることから、「ひかりの素足」の成立時期は、大正一一年前後――賢治の創作に大きな変化を与えた妹のトシの病死の前後――に該当すると推定している。（同注3、杉浦「ひかりの素足」一四八～一四九頁）

14　賢治が親友の保坂嘉内に宛てた書簡（大正七年一二月一六日付）には、アンデルセンの「絵のない絵本」についての言及があり、アンデルセンの物語を勉強しながら歌を作ったり、独学でドイツを勉強しているという記述がある（『校本 第十三巻』一一一頁）。

15　大正三年に出版された独日対訳のグリム童話の翻訳には、田中楳吉訳註の『獨和對譯 獨逸國民文庫 第一編 グリンムの童話』（南山堂書店、大正三年一〇月五日）や、小笠原昌斎訳註の『グリムお伽噺講義 上巻』（精華書院、大正三年一〇月二〇日）、年岡長汀訳註の『獨和對譯 グリム十五童話』（南江堂書店、大正三年一一月五日）などがあるが、小笠原昌斎のバージョンには独和対訳だけではなく、単語ごとに文法の説明があるため、本稿においては、このバージョンを使うことにする。

16　『グリムお伽噺講義 上巻』（（小笠原昌斎訳註）精華書院、大正三年一〇月二〇日（国家図書館、インターネット公開、閲覧日二〇一三年二月一一日））

17　天沢退二郎「峠を登る者」（初出「ユリイカ」九巻六号～一三号連載）本稿における引用は『〈宮沢賢治〉鑑』（筑摩書房、昭和六一年九月）一八頁によるものである。

18　藤井正雄、花山勝友、中野東禪「葬儀の手続きと準備」（『仏教葬祭大辞典』雄山社、昭和五五年一〇月第三版）八頁

19　鈴木宏「日本一の馬産と木炭」（細井計編『図説 岩手県の歴史』河出書房新社、平成七年九月）二一九頁

20　同注19、鈴木「日本一の馬産と木炭」二二一頁

21　中地文「『ひかりの素足』――一郎とは誰か――」（「国文学解釈と鑑賞特集宮沢賢治 謎の世界」第六五巻第二号、平成一二年二月号）四八頁

22　千葉一幹「「ひかりの素足」から「青森挽歌」へ――信仰の危機としてのトシの死――」（「人文・自然・人間科学研究」第二七号、拓植大学人文科学研究所、平成二三年三月）七八頁

23　高木昌史「子供の遺棄」（『グリム童話を読む事典』三交社、平成一四年二月）二八五～二八六頁

24　柳田國男「小兒生存權の歴史」（初出「愛育」第一巻第三号、昭和一〇年九月）。本稿における引用は『定本柳田国男集第十五巻（新装版）』（筑摩書房、昭和四四年八月）によるものである。

25 「近年になつて民法制度の際にこれを大變引上げた。その式を擧げる平均年齢は十五で、この年に元服して初めて一人前の仲間入りが出來、生産にも分配にも男一人と勘定されるほか、一人前として結婚もし得るに至るので」（同注24、「小兒生存權の歴史」三九三頁）とあり、地方によって違うが、「鯉幟は立てない」七つの年に大人として見なされ、「愛知縣殊に尾張へ行くとやつはづきと云つて「やつ八月」とも云ふが、數へ年八ツになつた時は宮詣りをしてそれを境に「八ツ大人」と云つて、八ツから大人」（三九四頁）だと見なされる地方もあった（傍点柳田）。

26 盛岡藩の凶作が飢饉に転化したのは一七回もあって、これは一六年に一度の割合で大凶作飢饉に襲われる計算になる。そのうちでもとくに元禄・宝暦・天明・天保の飢饉の被害が甚大で、盛岡藩の四大飢饉と呼ばれている。（同注19、鈴木宏「津波と冷害」一六一頁）

27 石井昌一「戊申敗戦の傷あと」（古川幹夫編『郷土史事典　岩手県　改訂』昌平社、昭和五七年四月）一七七～一七八頁

28 「ヘンゼルとグレーテル」の原文には「夫は「いやお前、俺はそんな事はしないよ。自分の子供を山の中へ置去りするなんて、思ひも寄らんことだ。すぐ獣が來て食べてしまはうよ」といひますと、女房は「此人は馬鹿だね、そんなことだと四人とも一緒にノタレ死にだ。お前さんもう棺桶の仕度をしてもいゝよ」といふて迫るものですから、夫もとうとうそれに賛成しました。「けれども子供が可哀さうだなァ」と良い人はいふてゐました。」とある。（『グリムお伽噺講義　上巻』一六九頁）

29 フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生　アンシアン・レジーム期の子供と家族生活』（杉山光信・杉山恵美子共訳、みすず書房、昭和五五年一月）

30 森口多里「社会生活」（『日本の民俗　岩手』第一法規出版、昭和四六年一一月）一四八頁

31 同注30、森口「社会生活」一四九頁

32 日沼倫太郎「解説」（深沢七郎『楢山節考』新潮社、昭和三九年七月）一八四頁

33 「二三時間歩いて來ますと大きな川の處に出ました。ヘンゼルが「おやゝ之は渡れないね、橋もなし丸木橋もない」といひますと、グレーテルは「ホントに、此處には船もないのね。だけれど彼處に白い鴨が泳いでゐるの、あの鴨に頼んだら渡して呉れませう」といふて（以下略）」（『グリムお伽噺講義　上巻』一九七頁）

34 吉原高志「ヘンゼルとグレーテル　悪い母親はみんな継母？」（『グリム〈初版〉を読む』白水社、平成五年一一月）七五頁

35 同注23、高木昌史『グリム童話を読む事典』二一四頁

36 ①鳥の声があんまりやかましいので一郎は眼をさましました。（『校本第七巻』二七〇頁）②外では谷川がごうごうと流れ鳥がツンツン鳴きました。（二七一頁）③みちはいつか谷川からはなれて大きな象のやうな形の丘の中腹をまはりはじめました。栗の木が何本か立って枯れた乾いた葉をいっぱい着け、鳥がちょんちょんと鳴いてうしろの方へ飛んで行きました。そして日の光がなんだか少しうすくなり雪がいままでより暗くそして却って強く光って来ました。（二七六頁）④けれども楢夫はその丘の自分たちの頭の上からまっすぐに向ふへかけおりて行く一疋の鷹を見たとき高く叫びました。／「しっ、鳥だ。しゅう。」一郎はだまってゐました。けれどもしばらく考へてから云ひました。（二七八頁）⑤そこまで

さへ行けばあとはもう十町もずうっと丘の上で平らでしたし来るときは山鳥も何べんも飛び立ち灌木の赤や黄いろの実もあったのです。（二七八頁）

37　同注6、鈴木健司「《象の頭のかたちをした丘》について」二六六～二六八頁

38　関口安義「ひかりの素足」（『港の人　児童文化研究叢書003　賢治童話を読む』港の人、平成二〇年一二月）三三八頁

39　宮沢健太郎「『青森挽歌』詩論　鳥として遍在するキリスト・トシをめぐって」（「国文学解釈と鑑賞　特集＝宮沢賢治の世界」平成五年九月号）七九頁

40　折口信夫「上代葬儀の精神」（初出「神葬研究」第一輯大正九年一二月）本稿における引用は『折口信夫全集　第二十巻』（中央公論社、昭和三一年二月）三七七頁によるものである。

41　阪下圭八「日本武尊」（『世界大百科事典』第二八巻、平凡社、昭和六三年三月／平成一七年改訂版）四九七頁

42　「ジョバンニとカムパネルラ――出会いと別れ」（「別冊太陽　宮沢賢治「銀河鉄道の夜」50、平凡社、昭和六〇年六月）

43　西村佑子「ヘンゼルとグレーテルの魔女」（『『グリム童話』の魔女たち　ドイツ魔女街道を歩く』洋泉社、平成一一年六月）五七頁

44　吉本隆明「宮沢賢治の童話について」（『宮沢賢治の世界』筑摩書房、平成二四年八月）二三頁

45　「青森挽歌」は詩集『春と修羅』（關根書店、大正一三年四月二〇日）に所収された詩群の中の一つである。

46　渡部芳紀「評釈「青森挽歌」」（「国文学解釈と鑑賞」平成八年一一月号）一七一頁

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年）